



単純作業



川崎ゆきお

「こういうことを毎日毎日やっておられるのですか」

「毎日じゃないよ。土日は休んでるし、休日もあるし、年末年始や盆は休みだよ」

「そういうことではなく、ずっと同じ、この単純作業のお仕事を続けられているのですね、と言いたかったのです」

「失礼な」

「え」

「単純作業じゃないよ」

「ああ、そうなんですか」

「単純なように見えても、毎日同じ条件じゃない。単純にやっているようで、そうじゃないんだ」

「つまり、単純を維持するのが大変だと」

「まあ、そうなんだけど、やってることは非常に単純だ。君にでも出来る仕事だ。今日からすぐにね」

「じゃ、やはり単純なお仕事なのですね」

「しかし、体調が悪いときは、この単調なことさえしんどい」

「ああ、それはどんなお仕事でも」

「まあ、そうなんだが、屋外の仕事だろ。だから、天気の影響を受けやすい。やってることは同じだけど、気温が違くと決して同じじゃない。私のような汗かきは、ちょっと気温が上がるか、湿気が多いと汗が出る。真冬でもね。だから、ずっと同じことをやってるようでも、同じではない」

「はい」

「それに、非常に調子の良いときもある。良いペースで進んでいるときがある。流れにリズムがある。良いリズムだ。そんなときは滅多にないがね。偶然、色々な要素が重なり、すごく気分がいい仕事出来る。まあ、これは本人だけにしか分からないけどね。誰がやっても同じ仕事なんだから、実際には差はないが」

「ずっと同じことで、飽きないかと思ひまして」

「そりゃ飽きるよ。そのうち飽きることを忘れるほど飽きる」

「はあ」

「と言うか、飽きるとか飽きないのレベルを超えるんだ。君はご飯を食べるとき、箸を使うだろ。その箸に飽きるかね」

「箸なんで、何でもいいですから、気にしたことはありません。いつも割り箸ですし」

「茶碗に飽きて皿にする。箸に飽きてスプーンにするかね」

「カレーだと、皿とスプーンですねえ。でも飽きるとかの次元じゃないです。そういうものだと思ってしまっていますから。茶碗と箸」

「そうだろ、この仕事もそうだ。そういうものだと、もう思ってしまっているんだよ」

「はい」

「茶碗やご飯より、食欲があるかどうかの方が気になる。同じご飯でもおいしく感じるときと、そう

でないときがある。だから、日々変化があるんだ。だから決して同じことを年から年中やっているわけじゃない。色々あるんだ、色々」と

「詳しい説明ありがとうございます」

「一年目と二年目とは違う。十年目と二十年目もね。向かい合い方が違う。やってることは同じなんだがね。一年の新米と、三十年のベテランとの差はないけど」

「これからも、ずっとこのお仕事を」

「ああ、慣れ親しんだからねえ。君が言うように単純だがね。しかし単純だからこそ続くのかもしれないよ」

「はい」

了